

抛渡橋

夕まぐれすだくほたるは谷川のふしぎの橋の志るべなりけり

〔和漢三才圖會三十四〕船橋 権〇中 俗云、一ツ橋、又云投渡橋、

〔攝陽群談七〕抛渡橋 同〇川 同所〇南ノ東昆陽庄内ニアリ、此橋昆陽舊跡ニ比スト云ヘドモ、所

縁不詳、

引渡橋

〔飛州志土一〕橋梁之製

引渡橋 丸木橋一本橋トモイヘリ、皆一列ナリ、是造ルハ圓木ノ面ヲ少シケヅリテ打ワタセル

モノ也、故ニ川幅二三間ヨリ四五間ニ至レリ、適十餘間二十餘間ナルモノアリ、是ラハ川ノ中央

ニ梓ヲ建テ、是ニ亘シカケテ二繼トス、仍テ木數モ二本、或ハ三本ヲ並ベテ幅トスル也、

打橋

〔八雲御抄三上〕橋 打萬 あすかゞは

〔倭訓栞前編四〕うちはし 神代紀に見ゆ、假に打渡したる橋也、又源氏枕草紙などに見えたるを、

細流に渡殿のきり馬道に板をうちわたしてかよふ道也といへり、萬葉集に、

はたもの、ふみ木もて来て天河打橋わたす君が來むため

〔萬葉集略解十上〕うちはしは柱なくして打わたすをいふ、宣長云、うちはしはうつし橋にて、こゝ、

かしこへ移しわたせばいふといへり、

〔日本書紀神代一〕書曰、〇中時高皇產靈尊、乃還遣二神、〇經津主、勅大己貴神曰、今者聞汝所言、深有

其理、故更條條而勅之、〇中爲汝往來遊海之具、高橋浮橋及天鳥船、亦將供造、又於天安河、亦造打橋、

〔神代口訣四〕打橋、梯也、

〔日本紀神代抄九〕打橋、師說、義不詳云々、天上ニ通ズベキタメ也、浮橋同

〔神代卷家傳聞書八〕打橋ハ、打渡ス橋也、

〔萬葉集二〕挽歌、明日香皇女木廄殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌、